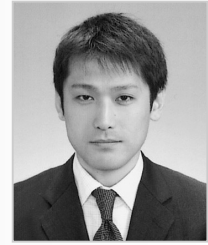


58期リレーエッセイ

若き才能たちが活躍できる機会を

会員
岡田 卓巳



初めての会務活動

タダ酒を目当てに、何度か所属会派の集まりに顔を出すうち、会派の大先輩からのお誘いを受けて、ある会派の執行部に加わるようになった。今のところ、指示されたことをこなすばかりで、まるでアルバイトのような仕事振りだが、それでも、これまで脈々と受け継がれてきた活動の重みを感じる。街頭法律相談の必要性や業務研修の有用性など、活動を通じて実感できたことも少なくない。

現在登録させていただいている2つの委員会でも、隅の方にちょこんと座っているだけだが、パンフレットの挿絵から司法試験合格者9000人案に至るまで、「何が、なぜ問題なのか」に少しずつ興味が持てるようになってきた。会務活動は、私にとっては、業務に関する情報収集の場でもある。

そしてなにより、会議終了後、タダ酒をご馳走になりながら、期も年齢もさまざまな先輩弁護士から、事件処理の方法、独立開業の苦勞、ゴルフ上達法や家庭円満の秘訣等々、さまざまな話を聞くことができるのは、理屈抜きに面白い。

独りぼっちにならないように

登録後半年以上が過ぎた今でも、仕事は半人前以下で、情けない気持ちになることが多い。そんな私でも、仕事をしていれば、質問への回答や事件処理の方針等、大小さまざまな事項について判断を迫られる。その度に自分の言葉の重みを否応なく意識させられ、心臓がギュッと縮むような緊張感を覚える。

決断に迷った時には、もちろんボス弁を手本とし、兄弁に教を請う。加えて、会務の席で先輩たちが話

してくれる貴重な経験談の数々が、やがて真に自分流の答えを求められるようになった時、大いに力となるに違いない。一人で悩んでいると、とかく一つの発想に凝り固まってしまうがちだが、先輩たちから学ぶ多様な視点やスタイルが、きっと私のバランス感覚を養ってくれている、はずである。

一匹狼の気概は大切かもしれないが、はぐれ狼になってしまうと、むしろ正しい道からどんどん逸れてしまう。そうならないように、たとえ会務から遠ざかっても、先輩や仲間たちとの交流を大切にし、一緒に楽しい酒を飲ませていただきたいと思っている。

私たちからも情報発信したい

私たちの期（58期）には、東京では既に就職難が始まっており、中には固定給ゼロという条件で就職した者もいる。事務所にもよるだろうが、国選の委嘱件数の減少等により、個人として研鑽する場が少なくなったという声も聞く。厳しい業務環境の中で、会費等の負担は相対的に重く感じられる。つつい将来を憂いてしまうような、嫌な閉塞感が漂っているのである。

こんな話をすると、2～3期上の先輩弁護士でも意外そうな顔をするから、新人を取り巻く環境は、短期間で急激に変化しているのかもしれない。やがて仲間入りする後輩たちのためにも、上の世代には、こんな私たちの（私の？）実感をもっと理解して欲しいと思う。

今後、若手弁護士の数がどんどん増えていくのだから、若手をもっと発言力を持ってもいいのかもしれない。同期の仲間には、個性的でバイタリティ溢れる人材が大勢いる。会務の場はもちろんだが、それ以外にも、そんな若き才能たちが活躍できる機会を、少しでも多く与えていただければと願っている。